

## マタイ 5:21-26 「彼の信仰、私の信仰」

「あなたがたも聞いているとおり、昔の人は『殺すな。人を殺した者は裁きを受ける』と命じられている。しかし、わたしは言っておく。兄弟に腹を立てる者はだれでも裁きを受ける。兄弟に『ばか』と言う者は、最高法院に引き渡され、『愚か者』と言う者は、火の地獄に投げ込まれる。だから、あなたが祭壇に供え物を献げようとし、兄弟が自分に反感を持っているのをそこで思い出したなら、その供え物を祭壇の前に置き、まず行って兄弟と仲直りをし、それから帰って来て、供え物を献げなさい。あなたを訴える人と一緒に道に行く場合、途中で早く和解しなさい。さもないと、その人はあなたを裁判官に引き渡し、裁判官は下役に引き渡し、あなたは牢に投げ込まれるにちがいない。はっきり言っておく。最後のクアドランスを返すまで、決してそこから出ることはできない」

わたしはだれも殺したことがない。だから、わたしには罪がない。わたしたちはそう言うことができるのでしょうか？

たといだれかを殺したことがないとしても、もし、心の中でだれかに腹を立てるならば、それは、殺したのと同じことだ。主イエスキリストは、この御言葉で、そういうことを言おうとしておられるのです。

いったい、ユダヤ教のおきてにおいては、ひとが誰かを殺した場合には、最高法院に引き渡され、裁きを受けなければなりません。それが、故意ではなく過失によって殺してしまった場合には、損害賠償金を負わせられて、最後の1円を払うまでは、牢の中から出ることは出来ませんでした。

一方、過失ではなく、故意によって殺してしまった場合には、この地上において裁きを受けるといっただけでは済みません。死んだ後なお、火の地獄に投げ込まれるという、さらなる裁きを受けなければならなかったのです。

ひとが、ひとを、殺したのであるならば、最高法院に引き渡されるとか、牢に入れられるとか、損害賠償金を負わされるとか、火の地獄に投げ込まれるとかいうことは、当然であって、わたしたちは納得が行くであります。

しかし、主イエスキリストは、こう言われるのです。ひとが、ひとに、腹を立てるならば、最高法院に引き渡され、牢に入れられ、損害賠償金を負わされ、火の地獄に投げ込まれる。腹を立てただけで？

この主イエスキリストの言葉を聞くとき、わたしたちは、自分に何も問題がない、と感じることは、もう、できないでしょう。むしろ、心の中で、こう叫ばずにはおれないでしょう。「ああ、主よ。だとしたら、わたしは、どうしたらいいのでしょうか？ わたしはいつもだれかに腹を立てていますのに？」

このようにして、何も問題がない、大丈夫だ、と思い込んでいたわたしたちは、主イエスキリストの御言葉によって、揺さぶられ、ほんとうの自分を暴かれ、自分の問題の本質に直面させられることになるのです。

ここで問題となっているのは、わたしたちが「兄弟たち」に対して、つまり、信仰の仲間に対して、腹を立てることがある、ということです。主イエスキリストは、まさに、この点を問題として、指摘しておられるのです。

わたしたちは、神を礼拝するために教会に集うものでありますけれども、わたしたちが自分の経験に正直に向き会おうとするならば、わたしたちは、教会において、ただ神を礼拝するというだけでなく、確かに、信仰の仲間たちに対して、腹を立てる、ということがあるのです。

わたしたちは、教会において、信仰の仲間に対して、どのように腹を立てるのでしょうか？

それは、主イエスキリストが第一に指摘されたように、信仰の仲間に対して「ばか者」と言うことによって、であります。この「ばか者」とは、聖書の原語においては、「知識の欠如」ということを、表わしております。

わたしたち教会に集う者は、教会的常識というものを共有しているであります。この教会的常識というのは、社会的常識、信仰的常識、習慣や伝統や暗黙の決まりごと、といったものが、渾然一体となって形成されているものであ

ります。

ここに、ひとりの信仰の仲間、すなわち「兄弟」がいて、この兄弟が、教会的常識に反することを言ったりやったりした場合、わたしたちは心の中で「ばか者」と思うことがありますし、また、口に出しては言わなくとも、態度によって「ばか者」と示すことがありますし、あるいは、本人がいないところで、あれは「ばか者」だ、と陰口をたたくことがありますし、さらには、本人に面と向って、あなたは「ばか者」だ、と言うこともあるであります。すなわち、「あなたは当然知っているべきはずの知識が欠如しているね。それゆえに、わたしはあなたに対して、腹を立てているのだよ」ということです。

主イエスキリストが第二に指摘されたのは、信仰の仲間に対して「愚か者」と言うことによって、わたしたちは腹を立てる、ということであります。この「愚か者」とは、聖書の原語においては、「人格の欠陥」ということを表わしております。

わたしたち教会に集う者は、教会的品性というものを共有しているであります。この教会的品性というのは、敬虔なクリスチャンに期待されるところの柔和さ、穏やかさ、謙遜さ、誠実さ、真面目さ、といったものが、渾然一体となって形成されているものであります。

ここに、ひとりの信仰の仲間、すなわち「兄弟」がいて、この兄弟が、教会的品性に反することを言ったりやったりした場合、わたしたちは心の中で「愚か者」と思うことがありますし、また、口に出しては言わなくとも、態度によって「愚か者」と示すことがありますし、あるいは、本人がいないところで、あれは「愚か者」だ、と陰口をたたくことがありますし、さらには、本人に面と向って、あなたは「愚か者」だ、と言うこともあるであります。すなわち、「あなたはクリスチャンとして当然身に付けているはずの品性が欠如しているね。それゆえに、わたしはあなたに対して、腹を立てているのだよ」ということです。

いったい、このように腹を立てるわたしたちというものを、本気で主イエスキリストは、問題にしておられるのだろうか？ これは、何かの勘違いではない

のだろうか？ 本来そういう意図はなかったのに、何かの間違いで、ここに、わたしたちが今日読んでいる聖書に、このような言葉が紛れ込んでしまったのだろうか？ だから、わたしたちは、主イエスキリストの御言葉を半分くらいに割り引いて考えたらよいのだろうか？

しかし、どうやら主イエスキリストは、本気でこのことを問題にしようとしておられるようなのです。わたしたちが、教会において、同じ信仰の仲間に対して、腹を立てることがある、ということ。常識の欠如のゆえに、腹を立てたり、人格の欠陥のゆえに、腹を立てたり、ということ。この、わたしたちが、やめようにもやめられない、腹を立てる、ということ、主イエスキリストは、本気で問題だと思っていられさるようなのです。

わたしたちは、どうしたらよいのでしょうか？

主イエスキリストは、互いに赦し合いなさい、裁いてはならない、ということをおっしゃいました。この方向に向かって、この線に沿って、わたしたちは進んで行くほか、ないでありましょう。そうするようと、主イエスキリストがわたしたちに期待しておられることは、明白であります。

さらに、パウロは、より明瞭な光を、わたしたちに投げかけています。教会において、信仰の仲間同士が、お互いにお互いを、どのように遇するべきかということ、パウロはローマの信徒への手紙で、このように述べています。

ローマの信徒への手紙第 12 章 3 節から 5 節をお読みいたします。新約聖書の 291 ページになります。

「わたしに与えられた恵みによって、あなたがた一人一人に言います。自分を過大に評価してはなりません。むしろ、神が各自に分け与えてくださった信仰の度合いに応じて慎み深く評価すべきです。というのは、わたしたちの一つの体は多くの部分から成り立っていても、すべての部分が同じ働きをしていないように、わたしたちも数が多いが、キリストに結ばれて一つの体を形づくっており、各自は互いに部分なのです」

ここに、わたしたちは、お互いが、お互いに、部分をなしている、と言われているのを見ます。

わたしが、一人で聖書を読み、一人でお祈りをし、一人で神と交わり、一人で信仰を持ち、一人で完全な信仰を得るならば、それでいいのだろうか？

パウロによれば、そういうことは、あり得ないのです。わたしたちは、信仰の仲間と共に聖書を読み、信仰の仲間と共にお祈りをし、信仰の仲間と共に神と交わり、信仰の仲間と共に信仰を育み、そうしてはじめて、信仰の仲間と共に完全な信仰へと進むことができるのです。

わたしたちが、自分一人で何でも出来ると思っているとしたら、それはちょうど、切り落とされた耳が、耳だけでもって 70 年も 80 年も生きることができる、と主張しているようなものです。

それゆえに、「彼の信仰は、私の信仰を補い、私の信仰は、彼の信仰を補う」ということを、わたしたちは真剣に考えなければならないのです。

わたしたちは、いったい、彼の信仰を、私の信仰をもって、どのように補うことができるのでしょうか？

わたしたちは、りんごの苗を植えて、五分後にそこから実を得ることができる、などとは思わないでしょう。りんごの苗を育てるためには、わたしたちは何年でも忍耐することができるのです。だが、りんごだけに、そうするのだろうか？

わたしたちは、信仰の仲間に対しても、同じように忍耐するべきではないだろうか？

パウロはローマの信徒への手紙で、さらに続けて、このように述べています。ローマの信徒への手紙第 12 章 9 節から 18 節をお読みいたします。新約聖書の 292 ページになります。

「愛には偽りがあってはなりません。悪を憎み、善から離れず、兄弟愛をもつ

て互いに愛し、尊敬をもって互いに相手を優れた者と思いなさい。怠らず励み、  
霊に燃えて、主に仕えなさい。希望を持って喜び、苦難を耐え忍び、たゆまず  
祈りなさい。聖なる者たちの貧しさを自分のものとして彼らを助け、旅人をも  
てなすよう努めなさい。あなたがたを迫害する者のために祝福を祈りなさい。  
祝福を祈るのであって、呪ってはなりません。喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共  
に泣きなさい。互いに思いを一つにし、高ぶらず、身分の低い人々と交わりな  
さい。自分を賢い者とうぬぼれてはなりません。だれに対しても悪に悪を返さ  
ず、すべての人の前で善を行なうように心がけなさい。できれば、せめてあな  
たがたは、すべての人と平和に暮らしなさい」

このパウロが示した標準。主イエスキリストがわたしたちに期待しておられる  
ところの標準。この「天国の標準」は、何と高いものでありましょうか。わた  
したちは、富士山を登るのでさえ、息切れがして苦しい思いをするのですが、  
いったい、この天を突き抜けるようにも思える高い標準に、わたしたちは、達  
することができるのだろうか？ わたしたちは、苦しさをおぼえます。

このようにして、やはり最終的問題は、わたしたち自身の中にある、この自分  
というもの、自我というものに、つきつめられて行くことになります。「天国の  
標準」に到底達し得ない、この自分というもの。信仰の仲間に対して、腹を立て  
ずにはいられない、この自分というもの。わたしたちは、この自分というも  
のを、自分で持て余しているのです。これが、わたしたちが経験する信仰的な  
危機です。

そうして、わたしたちは、ただ信仰によってのみ、この危機を突き破って行く  
のでなければなりません。この、信仰による突き破りについて、パウロは次の  
ように述べています。ガラテヤの信徒への手紙第2章19節と20節の言葉です。

「わたしは、キリストと共に十字架につけられています。生きているのは、も  
はやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです」

主イエスキリストは、腹を立てるわたしたち、というものを、本気で問題にし  
ておられます。そうすることによって、主は、わたしたちを追い立てておられ  
るのです。主は、どこへ、わたしたちを追い立てて行こうとしておられるので

しょうか？ 主は、最終的な地点にまで、わたしたちを追い立てて行こうとしておられるのです。すなわち、ここ、です。

「わたしは、キリストと共に十字架につけられています。生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです」

わたしたちは「ここ」へ、この地点へ、今日、来ているでしょうか？ ほんとうに信じることができさえすれば、すなわち「わたしは、キリストと共に十字架につけられています。生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです」ということを、ほんとうに信じることができさえすれば、わたしたちは、大いなる自由と解放を身に味わうであります。腹を立てる自分が、そこには、もういなくなっているからです。

祈りましょう。

祈り

「わたしは、キリストと共に十字架につけられています。生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです」この信仰的な境地を、わたしたちは、今日、この身に味わいたいと願っております。主よ、信仰を、わたしたちに、お与えください。

兄弟に対して、腹を立てる自分がおります。信仰の仲間の「知識の欠如」や「人格的な欠陥」のゆえに、腹を立てる自分がおります。

そうして、わたしは自分一人でやって行けると思う、自惚れている自分がおります。このような自分について、わたしは、なすすべがありません。

主イエスキリスト。どうか、このような古い自分が、キリストと共に十字架につけられ、いま生きているのは、もはやわたしではなく、キリストが新しいわたしを生きていたもうということを、信じることができるように。

どうか信仰をお授けください。

主イエスキリストの御名によって、お祈りいたします。

アーメン